

栄 新江著／高田時雄監訳／西村陽子訳

『敦煌の民族と東西交流』

(敦煌歴史文化絵巻)

東方書店 二〇一二・一二刊
A5 二五九頁 二四〇〇円

本書は、走近敦煌叢書『華戎交匯―敦煌民族与中西交通』(甘肃教育出版社、二〇〇八年)の日本語版で、地理的範囲は小さいながらも、東西文化交流の中心地として大きな役割を果たした国際都市、敦煌の本格的な通史である。

まず第一章では、先秦から漢代にかけて中国の西北地区に広く分布していた月氏の活動を取り上げ、莫高窟三三三窟の仏教史跡画のモチーフとなった「張騫通西域」の歴史的事実と、中原で祭祀・儀礼用の器や装飾品の原材料とされた「禺氏(月氏)辺山の玉」を手がかりに、当時の東西の人・物・文化の往来を描く。

続く第二章で、漢代の河西四郡設置期に焦点を当て、居延新簡・懸泉置漢簡を用い、長安と敦煌間の駅道・置(駅)の設置状況、外国使節団の行程や送迎・酒食・宿舎の手配等の様子を復元する。

第三章は、仏教都市としての敦煌。これまでに確認されている敦煌仏教に関する最初の記載は、中原のそれに比べて遅く、西晋時代の竺法護による訳経活動まで待たねばならない。しかし、東西交通の要衝である敦煌は、西域の訳経僧が中国へ、中国僧が仏教の原典を求めて西域・インドへ赴く際の経由地となつて、経済・

文化とも発展し、前秦時代には莫高窟の開鑿も始まる。一時、突厥の勢力範囲となるが、東突厥滅亡後は、唐の西域経営の前線基地としての役割も果たすようになる。

そして第四章では、三〇八世紀にかけて陸のシルクロードを席卷した商業民族、ソグド人の貿易ネットワークと、彼らを中心に形成された胡人聚落の分布・郷里化の過程を、敦煌・トルファン文書から読み取ると共に、中国各地から出土した文物・壁画に描かれたソグド人・祆教祭祀を紹介する。

第五章は、安史の乱後、吐蕃統治下の敦煌を扱う。敦煌は幸いにも戦禍を免れ、仏教信者である吐蕃贊普(国王)の庇護を受けて、伝統的な漢文化・漢化仏教の命脈も保つことができた。当時の敦煌チベット語文献には漢籍からの翻訳が多く、中原の禅宗もこの頃、敦煌を経て吐蕃へ伝播したことが明らかになってきた。禅宗を受容しなかったとする十四世紀以降の伝世文献の記述との矛盾から、吐蕃では後年インド仏教の強い影響を受け、漢地の仏教を貶める歴史の書き換えが意図的に行われたと見る。

第六章の張・曹両氏の帰義軍政権期においても仏教崇拝政策が継続され、敦煌寺院は隆盛の時を迎える。寺院の施入疏(布施の品目表・什物曆(財産帳)等)には外来の供養物が多数記されるほどで、会昌の廃仏で打撃を受けた唐へは仏典注疏を送るなど、唐の仏法復興運動にも寄与した。

第七章・第八章では、帰義軍政権と深い繋がりのあった近隣勢力、ウイグル(西州・甘州)と于闐の動向や、敦煌と両勢力との交流を、藏経洞で発見された文書等から読み解く。仏教・祆教・景

教・マニ教等に関する多言語文献が収められた蔵経洞が封印された理由にも触れ、カラハン王朝の東進と仏教の滅法伝説に対する危機感から、于闐より經典が集中的に運び込まれたのではないかと推測する。

敦煌学の泰斗が、世界各国に四散した文書、莫高窟・榆林窟等の壁画、出土文物等の豊富な図版を駆使して、自身の研究の蓄積と最新の研究動向をわかりやすく伝える良著。初学者のみならず、東西交流史・仏教史等の研究者にとっても必読の書である。

(吉田 愛)